The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イロニー
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1987, 13, p. 53-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4835
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イロニー

菅　野　盾　樹

序
1　二重意味説の誤り
2　イロニーの捉えがたさ
3　擬態説
4　反響説
5　擬態と相互知識
6　イロニーとパロディ
7　イロニー信号：イロニーの同定
8　イロニーと示し

イ ロ ニ ー

貧しい者は幸いだ，神の国は彼らのものとなる。　—イエス

…ぼくに言わせれば，ソクラテスは彫像屋の店頭に置かれてあるあのシレノスの像に，まったくよく似ているよ。作者は像を竪笛や横笛をもった姿に細工しているが，それを両方に開くと，内部に安置されている神々の像があらわれる…。

—プラトン『饗宴』のアルキビアデス

きれいはきたない，きたないはきれい。

—シェイクスピア『マクベス』の魔女

「聖なるロシアの古都！」と彼は突然忌々しげにベグニセンの言葉を鸚鵡返しに，その言葉の偽善的な調子をみんなの前であばくような口調で言った。　—トルストイ『戦争と平和』

序

イロニー[1]を考察するにあたり，あらかじめいくつかの問題を用意すべきだろう。てぶらでは探究のはじめようがないからだ。そうした問いには，たとえば次が数えられる。

文彩（あや）の形態の一つであるイロニーのもつ，他の形態にはみられない際立った特性はなんだろうか。

イロニーが他の文彩の形態と共通にもち，字義通りの表現にはみられない特性はなんだろうか。

イロニーはどのように解釈されるか。

イロニーの存在理由とはなんだろうか，いいかえれば，イロニーを口にすることになんの甲斐があるか。

もちろんこれでイロニーにかかわる全部の問題が尽くされるわけではない。考察のスタートを切るために，多すぎも少なすぎもしないいくつかの問いを展示したまでである。もう一つ，但し書きを加えよう。この論考は，これらの問題を順次とりあげるかわりに，また別のステップを踏む。もちろん，いつでも問題は暗に念頭に置かれているが，それらは攻略すべき前方の城砦というより，われわれを前におしすすめる鞭だといったほうがよい。打ち明けて言うと，イロニーそのものは考察の目的ではない。これが言いすぎなら，イロニーは砦の単なる門扉なのである。もしこの扉を押し開けることができるなら，イロニーというあまりにも些末な言語の断片から，人と人との行為の関係を，またそうしたかたちでの認識のいとなみを，なにほどか具体的に見通すことができるだろう。

具体的な現象全体として見れば，イロニーはまさしく人間の複雑さとみあった，あまりにも複雑な形姿をとって現れる。簡単な割り切り方や容易な要約を，それは許さないだろう。

イロニーはあらゆるうそうそとしたもの，悪しきものを灼く焔としてイエスの教えの奥底に燃えている。それはまたソクラテスその人が歴然と証拠だてているように，教育の言説の必須の成分でもある。獅子鼻の道化の仮面のうらがわに神のまなざしが隠れているというのだ。ときとしてイロニーは，魔女の台詞ではないが，あらゆるものを捻じ曲げ，転倒する狂暴な力を発揮する。ここでこうしたイロニー現象の全輪郭を始めから終わりまでたどろうというつもりは，われわれには無い。論考の関心はもっぱら，上に掲げた問題に代表されるような理論的枠組みに集中している。しかし，われわれの探究が終始ある基本的見地に収斂していくことをあらかじめ明言しておきたい。ベニグセンを犠牲にあげたイロニーにはっきり見てとれるように，イロニーの秘密は記号の反響にある。これが何を意味するかの解明がこれからの仕事になるだろう。

ほかの機会に筆者はメタファーと総称される文彩について理論的考察を試みた。しかし今われわれが企図する仕事は，すでに確立された理論の単純な拡充や応用などではない。繰り返すことになるが，イロニーに即しながら，再度理論を鍛練し，そこから人間のありのままの姿へ肉迫すること，少なくとも，そうした目的への確かな出立を遂げることが問題なのである。

1　二重意味説の誤り

イロニーにかんする従来のさまざまな見解（これをまとめて，イロニーの「古典説」と呼ぼう）に共通するのは，イロニーが「真意とは反対の意味をあらわす」言語表現である，という理解である[2]。遠出を予定していた朝，ひどい雨空なのを見上げて「いやはや，なんて好い天気なんだ」といったとする。語られたのは〈好い天気〉という字義どおりの意味であ

るが，意図されたのは，実は〈悪い天気〉という意味にほかならない。正面きって言挙げされた意味とは「正反対の」意味，語られはしなかったがそうされるはずであった意味は，文彩の形にまぎらわされていることになる。

こうした通俗の解釈はただこれだけのことなら，理論にとりほとんど無害だろう。しかしひとたびこの臆見が「理論」の美名を称し始めるとき，もう黙って事態を見過ごすわけにはゆかない。すなわち，イロニーにかんする古典説，いわば二重意味説の誕生である。しかしこれは両様の意味で，とても受け入れるわけにはゆかない見解だ。第一に，この説が広く文彩一般にかんする古典説の基本的見地をイロニーに適用したものにすぎないという事情がある。従来の修辞学は，語られた意味に加えて，意図され，文彩に盛り込まれた修辞的意味がある，と見なすのだ。したがって古典説に従えば，文彩の解釈とは，字義的意味を修辞的意味へ変換することだとみなされる。これはごく自然な段取りだろう。ここではもっぱらこの点を検討する。第二に，この説ではイロニーの真意が「正反対」の意味にあるという。多くの著者が，たとえ二重の意味という気前の好い立場に与しないまでも，この点では判を押したように同じことを述べている[3]。だがわれわれに言わせれば，これは誤った思い込みにすぎない。しかしこれについては後ほど取り上げよう（7節参照）。

あらかじめ意図され，文彩にもりこまれた修辞的意味（これをいささかこなれぬ言い方ながら，「文彩なされた意味」と呼ぼう）の仮定は，他の場所で述べたように[4] 誤りである。発言が語っている字義どおりの意味のほかに，発言が生じる以前からなんらかの形で潜在した意味（聞き手はこれを思考のなかに手渡されることになる）などはない。

これには，疑念を抱く向きがあるかもしれない。話し手の側に何かこれに類したもの——たとえそれをただちに実体視しないとしても——が皆無だとすると，彼はおよそ語るという行為をなしえないのではないか，と。というのも，語るとは，何かを語るつもりで語るということにほかならないからだ。発言はくしゃみなどとは異なり意図的行為なのであり，この場合意図はすでに語りの内容にかかわる。発言を単純な身体動作，例えば足を踏みだす動作と比較してみよ。人に「足を踏みだしなさい」と言っただけで，大抵の場合，立派に命令として通用する。しかし，「さあ，語りなさい」と言われても，当人は何をどう語ったらよいのか途方に暮れるだろう。（ただし例外がある。発言のポイントがもっぱら沈黙を破ることにある場合はその一つ。）この点，発言は思考に酷似する。もし教師が生徒に何一つ指示を与えずに「さあ，考えなさい」と解答を迫ったらどうだろう。こうした指図は不条理でしかない。反対に，単なる身体の動作が問題である場合，もしそれが記号過程の一環であり，解読コードやさまざまな慣例がそれに表現の構造を与えるなら（日本舞踊，弓道などの所作の場合），「足を踏みだしなさい」ではもう命令として通用しない。どのように踏みだしたらいいんですか，と弟子は師匠に伺いを立てるだろう。

だから，この言い分の一部は認めなくてはならないだろう。しかし，意図が語りの内容をあらいざらい決定すると見るのは行き過ぎである。それはせいぜい，形をなさない，切迫する不安のうちで体験された，意味の兆しとしか呼べないものだ[5]。言うつもりがことばにならなかったり，反対に，語る意図のなかったことがらがやすやすと発言の担うところとなったりは，ありきたりの経験に属する。言語はつねに意図を超過しているか，それには不足か，どちらかでしかない。ことばが語るのであり，ことばがことばするのだ。言いかえれば，字義的か否かを問わず，発言が聞き手のもとに届けるのは，ただ発言に盛り込まれた意味——字義的意味——にすぎないのである。

しかし，発言はいつも律気にそうした意味だけにかかわるわけではない。素材としての意味にかんしては，言語は字義性の圏をまず決して越えられない。だが，いわば素材を調理して味付けする腕を言語は備えている。腕が揮われる言語の水準はおよそ三つある。はじめは，発言から多義性を除去して，文の意味を一つに確定したり，代名詞の指すものを決定したりする水準である[6]。第二には，言外の意味という現象である[7]。たとえば，オフィスの同僚のあいだに交わされた次のような会話の断片を見よう。

——「金をおろしに，銀行に行ってきます」

——「今日は第二土曜日だったかな」

この受け答えは，もし字義的な意味だけを考慮にいれた場合，でかけようとして自らの意図を表明した初めの発言との連関で，ピントが外れている。それは当日の曜日にかんする話し手の信念の婉曲なことあげである。それぞれは，別々のことにすぎないように見える。この応答の真の意味をつかむために，口火をきった当人には，単なる日本語の能力（言語知識）に加えて，「月の第二土曜日に，金融機関は休業する」という，言語外のことがらにかかわる知識（非言語知識）と，一定の知識から別の知識を生みだす能力（論理）が必要なのだ。彼は有意性を欠く発言にそれを与え，いわばことばの身体に魂を吹き込むために，さまざまな知識を動員して，発言の暗黙裡の含意を割りだそうとするだろう。こうして，彼が「今日は銀行は休みだ」という言外の意味に逢着するとき，はじめて，先の同僚のことばはくっきりとピントを結ぶのである。実際，この含意から「だから，銀行に行くのはおやめなさい」という指図の言語行為にたどりつくのはそう難しいことではない。

注意すべき点は，発言の字義的意味のほかには，密やかな，しかし発言の生起する前から現存する「意味」などは，それに「言外の」というレッテルを貼ろうが貼るまいが，その影すらないという事実である。言外の意味は字義的意味を元手にして，論理的に導出されたものにすぎない。もし，導出された意味も，無からの創造が不条理である以上，なんらかの形で初めから「あった」のだと言いはるとすればどうだろう。だがこうした言い分は，あながち間違いだときめつけるわけにはゆかないが，些末すぎてほとんど意味がない。人から自分

では気づかなかった件を言われて，誰でも，なるほどその通りだ，実は自分もそう考えていた，といいがちなものである。この時点で理解可能な内容は，劫初からそうであったと，回顧されるのが常なのである。意味が時間を遡る足どりのなんと迅速なことか。

言外の意味という現象は，あくまで字義性の範囲を動きながら，その範囲では調達できない機能を既存の材料の調合によってもたらす。それは字義性の限界をさまざまな方向に超出する創造には違いないが，その秘密は字義性そのものの消費にほかならない。飢えに迫られて目の前の食物をむさぼるのは，なるほど掛け値なしに言って，食物の消費である。しかし，ここには質料を文化へ解き放つ人間らしい営みがあまり見られない。それは消費=破壊にすぎない。だが，素材に包丁さばきを加え，取り合わせを配慮し，テーブルマナーに従って食べる場合に，その味わいはある独特な仕方で深くなるだろう。質料はいまや新たな「意味」のアウラを放射しながら出現するだろう。今われわれは，消費=創造に身をゆだねているのである。ことばをやりくりして新たな意味を創造することも，同様に見做すことができよう。

隠喩その他のさまざまな文彩の形態は，素材から新たな働きをひきだす力のとくに目覚ましい事例である[8]。グッドマンのいうように，言語は昼間の正業のほかに夜間の仕事にも精をだす[9]。イロニーの場合もまた，話し手が語り出し，聞き手に摑まれるのは，発言にこめられた，普通の，字義的な意味にすぎない。しかし，もし修辞的な解釈機制がたくみに稼働するならば，イロニーへの荷担者たちは，新たな意味の剰余をえることができるだろう。もちろんそれは，ことばの生成に先立ってすでに「あった」実体などではないし，意図という喧ましい主人に仕える召使いでもなくて，その場で急拵えされた「機能」の現れである。

2 イロニーの捉えがたさ

イロニーと取り組んだ研究者は異口同音に目標の捉えがたさを嘆いている[10]。イロニーを整理しその分類表を作ろうとした者もその試案を示された者も，あまりに雑多な項目が並ぶのを見て困惑する。店先に所せましと各種の野菜がならべられるような具合で，文献にはじつにさまざまなイロニーがこれでもかとばかりに陳列される始末なのだ。この場にその若干を展示してみることは――これ自体イロニーにとんだやり方だが――はなはだよい教訓になるだろう。喜劇的イロニー，悲劇的イロニー，ソクラテス的イロニー，ソポクレス的イロニー，劇的イロニー，運命のイロニー，自己のイロニー，態度のイロニー，性格のイロニー，言葉のイロニー，状況のイロニー，宇宙的イロニー，ロマン的イロニー，等々。

ここにはわれわれが狙いをつけている言語表現の形態もあれば，個人の性向，態度というべきものもある。さらに人生観，主義があるかとおもえば，対象や状況の性状も混じってい

る。おまけに，イロニーは他のこれまたさまざまな表現の形態や情念なり性格とかさなりあったり，踵を接していたりして，紛糾の度をいやがうえにも高めている。いったいイロニーは，皮肉（sarcasm），パロディ，茶化し（mock），婉曲語法，あてこすり，逆説（paradox）などと，どこがどう違うのだろうか。（二三の種類にはこのように横文字をそえたけれど，この対応そのものにも問題は残っている。東西の文化のちがいが，さらに事態を複雑にする。）さらにそれは，懐疑主義，悲観主義，非人情（夏目漱石『草枕』），はてはニヒリズムなどとどこがどう違うのだろうか。

このような複雑多岐な姿で記号空間をゆきかうイロニーを，手のなかからすべり逃れてしまう捉えがたさともども，捉えて見せること。このことこそ，イロニーの理論につきつけられた第一の要請にほかならない。こうした場合とるべき方法は，デカルトやライプニッツがいったように，問題のあいまいな部分と判明な部分をふるいにかけて分離し，残った一部を単純な構成へ作り直すことだろう。そしてもしこの仕事が成就を見たなら，今度は，除外された部分をこの構成とどのように組合わせることが可能かを試してみることだ。具体的にいうと，ひとびとの間でおよそイロニーがたてるあらゆる響きにいったん耳をふさぐことから考察を開始しなくてはならない。そうしても，しかしその音響はつねに潮騒のように流れやまないだろう。

そこで，耳を澄ましてもっぱらある形をした波だけを聴こう。問題は言葉のイロニー（表現の媒体が言語であるようなイロニー），それもごく単純な談話の断片——たとえば，前にあげた，外出の気勢をそがれた者の「いやはや，なんて好い天気なんだ」ということば——である。この種の表現がイロニーである点は，直観にてらして明らかであろう。目標が決まるとともに，われわれの問題がはっきりする。いったいどのような要因がこの種の小規模な，記述やその他の扱いにむいたイロニーを構成するのか。さしあたり取り組むべき課題は，この点のつきとめである。

さまざまな文献（とてもすべてとはいいかねるが）に当たった印象では，ここでいうイロニーにかんして，従来二つの説がなされているようだ。ありていをいえば，理論と呼べるほどのまとまった説を差し出している著者はあまりにも少ない。そのなかでも辛うじて検討に耐えるのは，すなわち擬態説と反響説だけである。そこでまず，二つの説の紹介と解説をできるだけ簡潔にしておく必要があるだろう。結論を急ぐわけではないが，多くの点で反響説がすぐれていると言わざるをえない。われわれとしては，反響説の可能性をせいぜい明らかにすると共に，それに欠けた部面，というより，その主唱者によってあからさまに気づかれていない理論的含意を補う仕事に鋭意あたりたい。そのあとには，以上で得られた成果を記号論一般の次元から見直してみること，言葉のイロニー以外の場面へ成果を拡張してみることなど，多くの仕事が控えている。

3 擬 態 説

イロニーを語るということは，この説によれば，ある発言を真面目くさって語る人物を演じること，そのような発言が実はイロニーであることに気づかぬふりないし擬態をすることにほかならない[11]。イロニーの語源が事実を物語っている。「イロニー」のもとになったギリシャ語の「エイローネイア」(eirōneia) は，わざと無知をよそおうこと，自分のほんとうの姿を偽ることを意味していた。グライスは語源を踏まえていう，「アイロニカルであるということは，わけても（その語源が暗示しているように）ふりをすること (to pretend) である。人はこのふりをそのまま他人に認知させようとするのであって，それを公に口にするならば，効果がぶちこわしになるだろう[12]」と。

擬態の構造をもっと詳しく見る必要がある。イロニーの発言の場に登場するのは，単に一人の人格ではない。おもてむきの字義的発言に責を負うべき人物がいる。デュクロに従って彼を「話者」(locuteur) と呼ぼう[13]。しかしわれわれは，彼が擬態であることを知っている。話者の発言は思慮がたりないか，事実に反するか，なんらかの意味で軽蔑や批判の的でしかない。一つ注意すべきなのは，話者は虚構の世界にしか住まない人物であってもかまわないという点である。たとえば，話し手がふりをするのは，デンマーク王子ハムレットであるかもしれない。ともあれ，おもてむきの発言とは別に意図された真の発言が隠されているのであり，そうした発言に責任を負うもう一人の人格，すなわち「発言者」(énonciatenr) がいるのである。

イロニストが二重人格であるのに対応して，聞き手の側も二分される。一方に，話者が語りかけている聞き手の存在が想定される。彼は字義的発言を無邪気に信じているかぎりで，事情に通じない無知な聴衆の一員である。ただし，現実にそうした聴衆がいるか，それとも想像裡にしかいないかは，この際問題ではない。これはちょうど，劇中俳優がただ一人カーテンを背に演説をぶつ場面で，聴衆が舞台に登場していなくてもいいこととおなじである。また他方，発言者のことばを聞きとどける役目にあたる聞き手が存在する。彼は話者の思慮のなさも，聴衆の無知も，発言者の彼らに対する態度も，なんでも見通している。ただしこの場合，前とはちがって，彼の存在は現実のものであることを要する。でないと，せっかく企てられたイロニーが流産してしまうだろう。

一例に即して擬態説を確かめておく。「やれやれ，なんて好い天気なんだ」の話者とは誰か。それは例えば，自信あり気に，すくなくとも平然と「当日は好い天気でしょう」と述べ，いまもってその発言を撤回していない天気予報担当者である（もっともおなじみなのは，テレヴィの画面で天気図を背景に公言する人物であろう）。イロニストはそうした人物

の擬態を演じているのだ。さて，話者のことばにうなずく，とんでもなく無知な聴衆がいる。そして，イロニストの仮面に隠れた発言者は，こうした愚かな主張を公にする話者やそれに聞き従う聴衆を嗤うのである。彼はこの企てを実地に移すさい，彼の意図をキャッチしてくれる，事情に通じた聞き手をおおいに当てにしている。なぜかはいうまでもあるまい。聞き手がただしく意図を受けとめてくれなければ，イロニーは実らないからだ。思慮のある聞き手は是が非でも現実に存在しなくてはならないのである。

4 反 響 説

上に示した説に比べ，反響説ははるかに単純な構成しかそなえていない。そのポイントは，イロニーは人のことばのおうむ返しを要因とするという点である[14]。ところで，おうむ返しとは何だろうか。反響説の理解にはこの点の整理が必要だろう。

形態素や語や文といった言語単位が現実に生じる仕方を，論理学のやり方にならって，使用と言及に区別することができる。たとえば「太郎は小学生だ」という発言と「太郎は二文字の名だ」という発言とを比較すると，同じ実質——同じデザインや同じ音声——をそなえた「太郎」という二つの語が出現している。だが，はじめの文では問題の語はある人物を指示する代名詞として「使用されて」いるのであり，後の文ではもうその語は語の外の対象を指す働きを失い，「二郎」でも「正夫」でもない特定の人名（むしろ，音声なり図形なり）の資格で現れているにすぎない。いいかえれば，あとの場合，その語は，指示機能をともなう代名詞の名，あるいは言語単位について「言及する」言語単位に該当するのである。こうした区別が絶対的に設定できるわけではないという意味でこの整理には重大な問題が潜んでいるが[15]，それはさておき，ある言語単位を使用することからその単位について言及することを区別できること，これはあきらかであろう。いま問題は言及である。スペルベルらの反響説によると，イロニーとは他人の発言に言及することによって，そうした発言に対し話し手が抱く態度を表示する記号装置である。もう少し詳しく説のなかみを見てみよう。

イロニーを構成するのは，ある発言をおうむ返しに反復するというタイプの言及，すなわちこの説の命名の由来ともなった「反響言及」(echoic mention) である。正確を期していうと，反響は必ずしも発言どおりでなくともかまわない。天気予報担当者が実際は「明日は晴れるでしょう」と語ったとする。イロニストが「なんて好い天気だろう」と言って，これがイロニーの効果をあげることが十分考えられる。この場合，事実上の発言と同義な，すなわちもとの発言の言い換えに相当する発言が繰り返されるだけでかまわないのだ。したがって正確にいうと，発言の反響というより，発言の「意味」もしくはそれが担う「命題」の反響が問題なのである。

反響にかんするスペルベルらの観察に，反響の量と質という点から整理をほどこすことができる。まず，反響は量的にさまざまである。発言全部をおうむ返し式に繰り返す場合から，その大部分を，あるいはかなりな部分やほんの一部を，さらに極端な場合は単に一語だけを繰り返すにすぎない場合まで，いろいろであろう。たとえば，

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はあくまでにがし　（寺山修司）

にはあきらかに啄木の歌が反響している。明治の歌人が望郷をすなおに詠んでいるのに対して，この昭和の詩人（あるいは，詠み手としての話者）は聞き耳をたてる歌人の仕草に感傷をみいだし，彼をアイロニカルに突き放している。ところが眼のまえに東京の風に染まった，あるいは染まったふりをする友を見たとき，彼の思いは屈折する。禁断の故郷を「なつかし」とする思いに，彼は苦いものを飲みくだすのだ。こうした一通りではない歌のたたずまいが，ことばの片端を反復するだけで構築できる点に注目すべきである。和歌の伝統的技法としての本歌取りは，イロニー論の観点から見直す箇所があるかもしれない。（ただ本歌の作例について筆者が試みた不十分な観察によれば，ほとんどの例はイロニーとは異なるポリフォニーの響きを狙いとしている。その点で上の例は注目すべきだろう。イロニーの跡が顕著な本歌の類型は，例えば江戸時代盛行を見た狂歌にみいだされる。ただし作例の多くは，もっぱら滑稽を狙いとした「もじり」が基調である。）

反響の量におけるこうした多様性は，反響がことばのそれというよりむしろ命題の反響であることに起因する。ことばそのままを繰り返すかわりに，その含意を反響させることで，イロニーを作るには十分なのだ。それゆえ，不要な部分は削り足らない部分は補うなどして，元のことばを加工することができる。これは，含意という観点から捉え直すと，スペルベルらのいうように，反響には間接的と直接的の違いがあるということにほかならない。たとえば[16]，

――彼「私が悪いんじゃない」

――彼女「では，私が悪いのね。そう言うつもりでしょう」

という対話で，彼女の言い方がどこかイロニーの色に染まっているのは，ここにやはり反響が生じているからである。しかし，それはあからさまな反復ではなく，彼の発言が含意すると彼女が考えたものを，間接的に繰り返しているにすぎない。同時にこの例で一人称代名詞や「悪い」という語が直接に反復されていることにも注目しなくてはならない。含意の遠近は反響の量とからみあっているのである[17]。

一方，反響の質とは，反響の現実性の有無とその形態の問題である。上の例では，彼女は現実に彼の発言を一部繰り返している。反響は現実性をもつ。しかし場合により，この条件は取り下げてかまわない。その人物が「いかにも言いそうなこと」，しかし事実は言ったことのないことを反響させてもいいし，もとの発言が個人のものである必要もない。世間で通

用している常套句，諺や成句の類でかまわないのである。命題の反響ということで大切なのは，聞き手がそこに反響を認知できるか否かなのだ。いいかえれば，聞き手がそうした命題——反響命題——を同定できるかどうかがイロニーの構成要件なのである。これにひきかえ，命題の現実性やその形態は二次的な問題にすぎない。

5　擬態と相互知識

二つの説をつき合わせてみよう。より単純な構成をそなえた反響説から見ると，擬態説はいたずらに複雑である。第一に，字義的な命題に加えて意図され隠された命題を仮定しなくてはならないし，それぞれに責任をとる別個の話し手と，別個の聞き手を登場させなくてはならない。しかし既述のように，何かしら実体的な，意図された命題を仮設したり，そうした命題の背後に意図を想定することは不都合だろう。

第二に，たしかにイロニーでは話し手が二重になる。だがこれは，別の箇所で示したように[18]，イロニーのみならずポリフォニー一般にともなう事態である。要するに，発言の現場ではすでに字義性原理が反古にされているのだ。「話者」は純然たる消極的な役柄であり，いわば話し手の影である。擬態説のように，影に魂を吹込んでこれを実像に化すことは許されない。

さて擬態説にしたがうかぎり，イロニーを解する者は話し手がそのふりをする人物と彼が話しかけている相手が誰かを，つねに認知できるはずである。だがこれには反例を突きつけることができる[19]。ある考えを抱いた者が他聞をはばかって，決してそれを口外したことがない場合，擬態説の想定するような話者と聴衆のペアを同定しうるだろうか。すべてが想像世界ではこばれるのだと言い張って，逃げ道を見出すことができるかもしれない。しかし，このようなペアが不可能な事例もある。「何十人も強姦して殺した小平という犯人は，まったく大した人物だよ」という一見してイロニーとわかる発言を，真面目に語り，真面目に同意するようなペアは，どのような世界がめぐって来ようともまず存在できないのである。

またイロニーの認知にかんして，擬態説は片方の思慮のある聞き手に——ことによると一方の思慮ある話し手にも——あまりに複雑で不自然な重荷を負わせている。彼はすくなくとも，①話し手が演じている話者のことばどおりを，事情のわからぬ聴衆が信じるよう話し手が意図している事実，②この擬態に身をゆだねながら，発言者が話者を嗤い者にしている事実を，事情に通じた聞き手が知るように話し手が意図している事実，この二つを知らなくてはならない。また恐らくこれと対称的に，二役を演じるイロニストは①や②を聞き手が知る事実を自ら知る必要があるのではないだろうか。擬態説は意志疎通の基礎にかんして相互知識論に依拠しているのではないかと，疑われるのだ[20]。擬態説の主唱者に，本人が思っても

みなかった「論」を第三者が押し付けるわけにはゆかないが，すくなくとも，擬態説と相互知識論とがよくなじむのは見易い道理である。

実際，擬態が成立するためには，ふりをする者Sとそれを解する者Aとの間に「相互知識」が分ち持たれていれば好都合であろう。ここで，相互知識とは次のようなものをいう[21]。

(1) SはPを知っている。

(2) AはPを知っている。

(3) Sは(2)を知っている。

(4) Aは(1)を知っている。

(5) Sは(4)を知っている。

(6) Aは(3)を知っている…（以下同様）。

当面の擬態にかんして具体的にこのような形の知識を考えればこうなる。(1)Sは自らが擬態を演じていることを知っている，(2)AはS自らが擬態を演じていることを知っている，(3)Sは，AがS自らが擬態を演じていることを知っていることを，知っている，等々。すなわち擬態は，それをする側も観る側も，おたがい擬態であることを承知でことに臨んだ場合にかぎり成就するというのだ。

(1)が成り立つのは明らかである。本人に演技の意識がないところに擬態はない。また(2)も明らかであろう。観衆が演技を真面目にうけとったら，それはもはや擬態ではなくなる。しかしこれだけではまだ不十分である。擬態をおこなうSに，相手がSの行為を真面目なものとは解さず，あくまでふりだと察してくれるという確信がなければならない。それが演技であると百も承知な観客の前でしか，俳優は殺人の擬態を安心して演れないだろう。かくて(3)が成り立つ。ところでAは，Sが自ら擬態を演じている意識をもつことを，当然のことに思っている。S本人が何かのふりと真実の行為とを取り違えているという想定こそありそうもないことだ。こうして(4)が成り立つ。という具合で，以下同様にして無限にいたるのである。

擬態と相互知識の関係をやや詳しく見たが，当面，問題は二つに分かれると思われる。第一に，そうした基礎が擬態に必要かどうかが問題になるだろう。別の箇所で述べた結論をくりかえすと，相互知識は記号を仲立ちにした意志疎通の行為にとり必ずしも必要ではない[22]。相互知識は元手ではなく利得にすぎないのだ。

しかしわれわれがここで強調したいのは，第二の問題，すなわち，たいていの擬態には相互知識が事実ともなっているのではないか，という件である。もしそうだとすると，イロニーを擬態で説明するのは誤りである。というのは，相互知識の背景なしにさまざまなイロニーがやりとりされているのだから。「やれやれ，なんて好い天気なんだ」を解釈するには，これが字義的な発言ではないことを知るだけで十分である。話し手が天気予報担当者のふり

をしているという知識，あるいはこれを核にした他のあらゆる相互的な知識は不要なばかりか，心理的な事実としても不在だといわなくてはならない。少なくとも筆者は自身を顧みて，そうした知識を発見できないことを告白しよう。

6　イロニーとパロディ

反響説の素性を見極めるために，ここで擬態と反響の関係を正確に捉えておきたい。反響は擬態そのものではなく，より簡単な構成に基づく記号系にほかならない。逆にいうと，擬態は反響を類とするひとつの種に相当する。ここをきちんと押さえよう。

話し手がある命題を使用するふりをすることに起因するイロニーは，たしかに存在する。世にソクラテス的イロニーといわれるものの多くはこれだろう。名高い話だが，ソクラテスは「汝より賢い者はいない」というデルポイの神託を信じられず，世に賢者の誉れ高い人々のもとを尋ねては問答をかわし，神託の反証を得ようとする。だがこれを重ねるうち，彼は「賢者」を自他ともに許す者たちこそが無知であり，自分は少なくとも自らが無知であることを知るかぎりで「賢者」なのだと気づく。以来彼は，プラトンの対話篇が伝えるように，愚者の擬態に身をやつすことを，真理探究の方法としたのであった。愚者という仮面をつけた彼が青年たちに問うのは，空とぼけの質問にすぎない。ところで繰り返すと，擬態は反響の一種である。反響という地点から出発してソクラテスのイロニーへ到着できるのだ。

しかしこの逆は不可能である。いいかえれば，擬態から出発してはつかめないイロニーがある。前出の，大量殺人犯にまつわるイロニーはその一例。擬態はイロニーの必要条件ではない。ではそれはイロニーの十分条件だろうか。擬態がいつでもイロニーを生むとはかぎらない。役者の演技は，これこそ間違いなく擬態に分類されるものの，それがただちにイロニーの効果をともなわないことは明らかであろう。

スペルベルはイロニーを構成する反響を「意味」ないし「思考」の反響として，他人のことばや表情の模倣にすぎない反響と区別している[23]。ソシュールの用語を借りてこのポイントを整理するなら，記号が記号表現（signifiant）と記号内容（signifié）の表裏をそなえているところから，反響にかんしても，記号表現を再現するものと記号内容をそうするものとを区別できる，といえる。あらかじめ警戒するにこしたことはないのだが，ソシュール流のこの区別を絶対視――それも二重に――してはならない。「悪魔の骨」devil's bones といえば，これは骰子（さいころ）をいう成句である。この場合，アクマノホネという音は，〈悪魔の骨〉を内容とするひとつの記号表現であるが，この裏とおもてをそなえた記号が，今度は，骰子を記号内容とするそれ自体一つの記号表現なのである。しかし，いまひとつの絶対化のほうが問題であろう。使用と言及の区別がそうだったように，記号表現と記号内容とは確かに区別

できるものの，両者は記号の現実性において入り混ざっているのだ。あたかも一枚の紙のおもてに裏がすけるように。いいかえれば，記号の表現面は記号作用にはまったく嘴をいれない，記号の無意味な基体ではなくて，特有なやり方で記号作用に寄与をはたすのである[24]。

以上をよくよく念頭に置いたうえでなら，次の整理は十分に使いものになろう。反響のうち，記号表現にかかわるそれは，少なくとも単なる模倣（mimicry）とパロディとを含んでいる（この種の反響としてこれで全部を枚挙したわけではない）。ことばのうわつらを真似しても，イロニーにはならない。寄席芸人の物真似は，たいていの場合，ただただ娯楽として笑いを誘うだけであろう。もちろん物真似がときとして——いや，たびたびと言ったほうがいいかもしれない——辛辣な気味をおびたり，アイロニカルな効果を生むことがあるだろう。しかし依然としてそれは物真似にすぎないのだ[24]。

両者の区別がときに曖昧でしばしば微妙なことは確かである。だが，概念上の区別を事実上の判別の難しさを理由に，いい加減にしてはならない。模倣やパロディはあくまでイロニーとは別なのである。しかしこういうことも起こる。芸人の演技がはじめ記号表現の紋切り型の反復であり，目の肥えた観客の失望を誘うものでしかないとする。だがやがて演技は熱をおび，いつしか単調さは破られる。彼は記号内容に踏み込んだ微妙な芸を展開し，観客は身をのりだすのだ。もうそれは単なる物真似ではなく，性格の批評であり，人物の評価，人生観の表現ですらある。いいかえれば，彼はことばの肉体のみならずその魂さえも再現しつつ，今やこれに対しある種の態度をとっているのだ。ここに見るのはまぎれもないイロニーである。

表1

イロニーとは	パロディとは
記号内容の	記号表現の
反響であり	
擬態とそうでないもの との両方がある。	

事実これまでは，パロディとイロニーの区別はしばしば曖昧まま放置されてきた。だがもし一方を記号表現の言及あるいは直接引用，他方を記号内容の言及あるいは間接引用と整理するなら，両者の差異があざやかに浮かびあがるはずだ。パロディストが他人の記号表現を再現することに有意性が欠けるのを見て，聞き手は，対応する記号内容に何かの味付けをして，場合によってはそれを否定的に彩ることで自らの解釈を決着する。これに対して，イロニストが自身の記号表現を——といってもそれはなかば他人のことばであるが——特有な調子でさしだすことに有意性がないのを知って，聞き手はやはりおなじように，その記号内容

に否定的な要素を混入して解釈の首尾をとげようとする。この二つの可能性がひとつの発言のうちで結びつき，いっそう興趣をたかめることもあるだろう。だが繰り返すようだが，それぞれはあくまで別ものなのだ[25]。スペルベルにいわせると，擬態説はどちらかというとパロディの説明にむいているという[26]。この言い方は人を誤解させるものだろう。二つは区別されながらも相互に踵を接しているからである。以上に述べてきたイロニーとパロディの比較を簡単に表示すれば上のようになる（表1）。

はじめに指摘した，擬態としてのイロニーにかんし付言しておこう。これはいうまでもなく反響の形態であるが，ただしこの場合は記号内容の反響が問題なのである。また，もちろんこの種の反響がつねにアイロニカルな効果をあげるとはかぎらない。ある命題に言及するだけのことであれば，誰のふりをすることもなく単なる間接引用でもすむことである。また字義的な疑問の場合も同様である。ある数学者が定理Tを証明したと主張するのに耳を傾けていた同僚が，Tの変形 T′ を引いて「では，T′ でしょうか」と問い質したとしても，これは必ずしもイロニーではない。それをイロニーにするには，少なくとも記号内容を擬態というかたちで反響することが必要である。

7　イロニー信号：イロニーの同定

反響と擬態と，それぞれに要因を求めた二説の比較をひとまず中断して，今度は反響説そのものの可能性を，ひろく記号論一般の背景を考慮にいれつつ検討したい。

イロニーという記号系の特色は，他のさまざまな比喩の形態と同様である。つまりイロニーとは，字義的に解釈された場合に有意性が不足するため，それを奪回すべく呼び起こしという危機的な解釈的契機へ訴えざるをえないような記号系にほかならない[27]。したがってイロニーにかんする理論的諸問題は，メタファーにかんするそれらと精確に並行する。問題の最たるものは，人はどのようにしてイロニーをそれと認知するかという問い，すなわちイロニーの同定の問題であろう。同定をみちびく条件の筆頭は，すでに述べたように，聞き手にとって，当面する発言に有意性が欠けるということである。わかりやすい例をあげるなら，「いやはや，なんて好い天気なんだ」とは言うものの，実際はひどい降りなのである。（ただしすぐ後述するように，これはイロニーが発言の意味する場面と反対のことを述べる表現であることをいうのではない。有意性の欠如には他にさまざまなかたちがありうる。）言うまでもなく，他の比喩の場合も事情はおなじであって，これだけではイロニーの識別は不可能である。ではほかにどのような手掛かりがあるだろうか。

これには異論が聞かれるのだが，「イロニー信号」あるいはイロニーに特有な声調その他の表現上の特徴が存在するのだろうか[28]。もしイロニー信号があるとすれば，それは概念の

区分からいって，記号表現に属する。もちろんある意味で，発言の内容がイロニーの効果に寄与する点は否定できない。見識のない教師が生徒に教えている図は，それだけでアイロニカルだ。しかし，この効果は命題の反響に由来するのであって，内容そのものにではない。内容はイロニー同定の標識とはならないだろう。せいぜいそれは発言の文脈とあいまって標識を捜させる誘因として働くにすぎない。だが前述のように，記号表現／記号内容という区別は，記号が実現された形態においてはないまぜになっている。

この点を念頭にあらためて具体例を凝視するとき，いつでもイロニーになにか表現上の特徴がともなう事実が浮かびあがるだろう。鼻にかかった声，わざとらしくゆっくりとしたしゃべり方，大袈裟な強勢——これらはそのほんの若干の例にすぎない。もちろん書き言葉ではこうした手は使えないが，そのかわりアンダーラインや傍点による強調，文体の工夫——感嘆詞の多用，文語や詩語の採用，二重否定など，やり方はいくらでもある——などでおなじような効果をあげられる。

ただし，イロニー信号の身分を誤解しないように注意すべきだろう。「これこれを命令する」という言い方が，まさに命令の信号であり，「正直いって」という前置きが告白の信号でありうるという意味では，これら特徴はイロニーの信号ではない。「アイロニカルにいって，好い天気である」というのは底がわれていて，およそイロニーなどではない（もっとも，全体がまた別のイロニーになる余地は残っていると言えるかもしれないが）。イロニー信号は直接自己の形態を語りつつ合図をおこなえないのだ。この点で，嘘，ほのめかし，あてこすりなどと同じである。

問題は，反響している元の命題を同定できるかどうかである。反響命題の同定へこれら標識が寄与するかぎりで，さまざまな表現上の特徴はイロニー信号である。ここで，命題の反響がつねにイロニーを構成するとはかぎらない事実を想起したい。巨匠の作品——たとえばベラスケスの「宮廷の侍女たち」——の画学生による模写とピカソがそれを下敷きに描いた同名の連作とは截然と区別される。前者が自己流の表現をできるだけ取り除きひたすら名作の正確な再現を目指すのに対し，後者は自分の眼が生みだす歪みやひねりをそこに盛り込み，原作のパロディ——あるいはそれ以上のものを創造しようとする[29]。イロニー信号はいわばこの種の歪みやひねりに相当する。いいかえれば，それは一方で，命題が反響をともなうことを知らせると同時に，他方では命題に対する話し手の態度を暗示し，こだまとは別の，オルターナティヴな命題の創造へと彼を誘うのである。

イロニーを運ぶ発言に有意性が欠けるということは，正確にはどのような事態なのか。誰でもすぐこう考えつく。有意性の欠如は，発言があらわす字義的意味とは反対の状況が存在する点に起因するのだ，と。たとえば雨降りという明々白々な状況下で「好い天気だ」ということが，この発言を不条理にするという。こうして，古くからイロニーは文字どおりの意

味とは正反対の意味をあらわす，とされてきた。これが誤りであることは繰り返すまでもない。しかし，この言い方がいくらか真実を含む点まで否定できないだろう。事実，多くの事例では確かにこうした事態が認められるように思われる。真実はどうなのか。ここでもっと観察を深めたほうがよさそうである。

「言内の意味の反対の指示条件を満たす場面的状況」[30] がありえないような場合，はたしてイロニーを制作できないものか。この点を観察してみよう[31]。具体的にいえば，問題になるのは定義をあらわす文（「独身者とは結婚していない者のことである」）や真なる文（「陽は東からのぼる」）などである。もしそうした状況がない場合にイロニーが成り立たないとするなら，例文をイロニーに動員するのは不可能なはずだ。というのも，定義による真理にせよ，経験的な真理にせよ，他のどんな真理にせよ，そもそも真理を語ることは真理を語ること以上でも以下でもなく，ここにイロニーの効果がまぎれこむ隙はないように見えるからである。

けれども，作れないというこの断定が疑わしいことはたちまち露見する。確かにたいていの場合，そうした場面的状況は不在であろう。けれども，それより大切なことは話し手がある命題に対して批判や嘲りなどの否定的な態度で臨んでいるという事実なのだ[32]。それゆえ，真理に対してすら否定的な態度をとれるものかどうかが，問題の別かれ目であろう。真理とはなにか，というピラトの問いをこと細かに吟味する余裕がいまはないし，それは主題とは幾分ずれる話題だろう。ここでは真理にかんするおおまかな見方を論証抜きで示すだけにしなくてはならない。この真理観からすると，イロニーと真理は決して背馳しないのである。われわれは「永遠」をじかに概念化できないが，そのかわりに「永続性」の概念でそれを説明できる。グッドマンの言うように，これとおなじ事情が真理にはある。真理とは「全面的かつ永遠な信憑性」であって，永遠同様人間はそれをじかに摑めないが，しかし人間に達しうるもので説明できるのである[33]。

例にあげた一般命題「陽は東からのぼる」はきわめて蓋然性の高い真理である。だが経験的な一般化のつねとして，命題の述べる事態を否定してもあながち矛盾ではない。いいかえれば，そこでは太陽が西からのぼるような，現実世界と代替できる，同様に真なる世界が存在するかもしれないである。この意味で，真理に対してすら，批判的なまなざしを投げうると言わなくてはならない。定義文にかんしてもほぼ同様な論点を指摘できよう[34]。たいていの真理はイロニーを撓ねつけるほど硬質ではない。あるいは，真理の確実性，その堅固さは，もう一つの真理を容れるほどほどの硬さだといえるかもしれない。例外は論理的な真理，それを否定すると矛盾に陥るような命題である。この種の「真理」は，「もう一つの世界」を構想するやいなやすでにそこに現前する。（だから，この種のものを「真理」と称するのがおかしいのだ。）さすがのイロニーもこうした命題を反響するわけにはゆかないように思われ

る。ところで，真理を語りつつ同時にそのことばがイロニーであるという事例は，いわゆる客観的真理や学問上の真理の場合より，むしろ常識や世間知の真理にかんしてより頻繁に生じる。時代を風靡するイロニーを調べることは，逆にいえば，当代の常識あるいは真理の歴史を明らかにすることであろう。観察の結果は明らかだ。問題の条件はイロニーの必要条件ではないのである。

この観察は，フリードリヒ・シュレーゲルが言い出し，ヘーゲルが憎んだロマン的イロニーとの関連でとくに注目に値する。イロニーを生きる主体は，何物にも囚われない純粋な自我である。彼はさながら万物の創造者たる神あるいは芸術家であって，人倫，愛，法のみならず，一切の事象はこの自我の所産であり仮象にすぎない。自我は追い詰められたぎりぎりの窮所でひらりと限定を乗り越えて，自らの自由をみずからことほぐ。そのかわり，自我はいわば何事にも本気になれない。本気に事象にかかわり，それに没頭することは，自我の形式的なまったき否定性にもとるからだ。彼にとり生命にかえても守らなくてはならぬのは，ほかならぬ彼の自我である[35]。ヘーゲルが浪漫派のイロニーを批判したのは，ある意味でそうした境位が可能だと見たからにちがいない。真理に対してすらイロニーを表明できるという右の観察は，この可能性の裏づけるものである。

ところで，これがイロニーの十分条件でないことは改めていうまでもないと思う。雨降りに「好い天気だ」と述べることはままありがちなことであろう。それは単なる事実誤認，言い違いなどにすぎない。こうして，発言の言内の意味と反対の真理条件を満たす状況が存在するという条項は，どのような意味でも，イロニーの条件には該当しないのだ。

要約しよう。イロニーの同定の基準は，まずもって反響命題を構成するために必要な基準である。次いでそれは話し手の反響命題に対するなにか否定的な態度を，解釈者の側に認知させるための手掛かりである。これを引き受けるイロニー信号の役割についてはすでに述べた。なるほど擬態なる概念を援用するなら，以上について説明をほどこすことができる。しかしながら擬態という複雑な説に拠らなくとも，反響という概念をそれとはちがう方向で限定することにより，こうした点について十分に理解を届かせることができるだろう。反響のやり方——それはまさにことばによる所作にほかならない——が反響命題への話し手の態度を暗示するのである。後にいささかあとづける予定であるが，イロニーが必ずちらつかせるこの「暗示」の最終的な説明は，発言の文脈と有意性公理との交互作用に求めることができるだろう[36]。

これまでのイロニー追跡の結果から，記号論にとってどのような教訓を汲みとれるだろうか。途中であるが，この点を節をあらため確認しておきたい。その後にふたたび，反響という観点から，イロニーの細部の観察を続行しよう。

8　イロニーと示し

イロニーの本質としてわれわれは，反響ないしある種の言及を見い出した。イロニー信号という概念を誤解してはならない。チャイムの音が誰かの訪問の信号であるという意味と，発言にそなわる一定の特徴が自らのイロニーであることの信号だという意味とは，正確には同じではない。第一に，しかじかの強勢，息継ぎ，音調，語彙の使用などは，発言の内容に外からつけ加えられた，したがって内容から自在に引き離すことができる標識ではない。いいかえるなら，それは発言の不透明な実質でありながら，そのまま記号作用を放射しつづけている。チャイムの音と誰かの訪問とのつながりは，これに比べればはるかに緩やかで恣意的なものだ。これに比べれば，赤いランプと停止命令のつながりのほうがやや強いといえるだろう。赤は血の色であり，危険をいわば自然に連想させるからである。イロニー信号とイロニーの結びつきは，一枚の絵画のマチエール，色，明暗などと，その絵が表現するものとの結びつきに似ている。だから第二に，そこに信号を読み解く汎用のコードは存在しない。コードをここで云々できるとしても，それに頼れるのは解釈のほんの一部の局面でしかないだろう。解釈の大半を聞き手は即興でやりとげるざるをえないのである。

イロニーに発見された反響は，特有な「示し」の形態である。示しという記号作用の次元ほど，ながく理論家による無視の憂き目にあってきたものはない。イロニー，ひいては文彩を問題にすることは，なかんずく示しの意義を再発見することである。われわれがここで遙かに望む目的の地がどこかは明瞭だろう。示しを記号に取り返すことから始めて，記号全般にわたって考察をやり直し，記号そのものであるような人間精神へ，あらぬ方向に逸脱しがちな現代の探究を後にして，到り着くこと。この点についてはこれまで何度か指摘してきた[37]。

とくに隠喩の解釈にさいして，この次元が鍵をにぎることをわれわれは論証した。すなわち，発言の字義的な意味とむすばれた，比較ないし類似という示しに触れて，呼び起こしの火蓋が切っておとされるのである[38]。ところで隠喩の場合，記号のこうした次元は，その名とはうらはらに，表立っていない。だがイロニーは最も明確に，記号のこの精髄を指し示すのである。イロニーにおいては，示しはいわば等身大で出現する。例えば，さまざまなイロニー信号を担った「なんて好い天気なんだ」という発言全部がある種の引用であり，別の命題の解釈にすぎない。それは発言とはいえ，自らの足で立てない発言，第三者に支えられてかろうじて発言の面目を保ちうる発言である。いいかえれば，この発言は端から端まで示しでできているのだ。イロニーの記号論に対する意義は，ここに横たわっている[39]。

〔註〕

1) 「イロニー」は横文字の ironie, irony などを音写してつくった訳語。これに該当するやまとことばはないらしい。明治期にさまざまな訳が試みられた（佐藤信夫，1981，第7章に具体的に説明がある）。そのなかでは「反語」が有力であろうが，「イロニー」ないし「アイロニー」（前者がフランス語，ドイツ語，後者が英語の音写）と比較して平淡な日常語という点で特段の差はない。本稿では，多数決に従うのではないが，「イロニー」を採用する。「反語」の造語の意図は，伝統の修辞学のイロニー観にある。話し手の意味するところと「反対の」意味をもつ表現（＝「語」）だ，というのである。これは以下で述べるように，誤りではないにせよ紛れの多い言い方だ。しかし，もしわれわれが見るように「反響」がイロニーの構成要素だとすれば，こうした造語の由来とは関係なしに「反語」を採用するのも悪くはない。

2) 古典説の具体例については，佐藤信夫，1981，第7章を参照。

3) 例えば，Grice, H. P., 1975；安井稔，1978；佐藤信夫，1981などを見よ。

4) スペルベルがこの点を明らかにした。菅野盾樹，1985a, p. 59以下参照。

5) メルロ=ポンティは意味を動機づける，潜勢態における「思考」あるいは「意味志向」に言及している。Merleau-Ponty, 1960, p. 26 *seq.*；菅野盾樹，1983，第3章，特に p. 112 以下を参照。

6) その他，代名詞が文脈上何を受けているかの決定（すなわち，照応関係（アナフォラ）の決定）もこの水準でおこなわれる。これは主として，クワインのいう「場面文」，ラッセルのいう「自己中心的な語」の介入する文の水準であるといってよい。Quine, 1960, section 9（邦訳，1984，p. 56 以下）参照。

7) 言外の意味について詳しくは，安井稔，1978；Smith and Wilson, 1979, ch. 9；Sperber and Wilson, 1986, ch. 1 を参照。

8) ただし，安井稔，1978とは異なり，われわれは「言外の意味」に隠喩などの文彩の形態を含めない。単なる言内の意味の範囲を逸脱するという消極的な意味では，確かに，文彩は言外の意味にかかわる現象である。だが仔細に見ると，文彩には「呼び起こし」という，ありきたりな言外の意味解釈には含まれない要因がともなう。詳しくは，われわれの『メタファーの記号論』，とくに第三章を見よ。

9) Goodman, N. 1978.

10) 「アイロニーの概念の捉えがたさはあまりにも悪名高い」とある批評家は述べている（ミカ，1973, p. 4）。また彼はこうも述べる。「アイロニーについて簡明な定義を下そうとする際に前に立ちはだかる主な障害は，アイロニーが簡明な現象ではないという事実である」と（同書，p. 14）。；ブースも，アイロニーという主題は，とくにロマン主義の時代以降さまざまな混乱の母であったという（Booth, W., 1974, p. ix.［佐藤信夫，1981，p. 195 に引用］）。

11) この説のもっともあからさまな表明は，Clark, H. H. and R. J. Gerrig, 1984 にある。彼らは朋党として，Fowler, 1965や哲学者 Grice, 1978の名を挙げている。おおかたの著者が依拠するのが——それもほとんど無自覚に——この説だとおぼしい。ミカ，1973, p. 52；ベルクソン（Bergson, 1900, p. 447）やヴィンリヒ，1973もイロニーを嘘あるいは擬態の一種と見る。

12) Grice, 1978, p. 125.

13) Ducrot et al., 1980, pp. 43–45.

14) この説を代表するのはスペルベルとウィルソンである。Sperber, D. and Wilson, D. 1978；Sperber, D. and Wilson, D., 1981；Sperber, D. and Wilson, D., 1986, ch.4, section 10. 説にまでまとめられてはいないが，この要因は他の研究者によっても気づかれている。安井稔，1978, 25節を参照。また，心理学者との協同で，この説は実験による検証に委ねられた。J. Jorgensen et al., 1984を参照。

15) この区別は絶対的なものではない。レカナティ，1982，第4章を参照。

16) J. Jorgensen et al., 1984, p. 9.

17) 最近の著作でスペルベルらは「言及」の形態としてのイロニーという言い方を撤回している。というのも，論理学でいう「言及」には言及される記号形態と言及する記号形態の同一性が要求されるが，ここで見るように，イロニーは必ずしもそうではないからである。代わりに，言及をも一部として含んだ「解釈」という広い概念が提案されている。Sperber and Wilson, 1986, pp. 263–264, note 25を参照。だからといって本稿の叙述に変更の必要はない。「言及」という用語はそもそも比喩的に使用されたのであって，そのかぎり間違いではないからである。

18) 菅野盾樹，1985，pp. 162–165参照。

19) Sperber, D., 1984, p. 132 *seq.*

20) 事実，擬態説を唱えるクラークらは，イロニー解釈が話し手と聞き手がお互いもっと信じられている相互知識に基づくと明言している。ただし，彼等の相互知識のなかみは十分明らかではない。Clark et al, 1984, p. 124を参照。
21) 相互知識論と，それに対立する共有知識論について，菅野盾樹，1985a，pp. 291-299を参照のこと。
22) 菅野盾樹，*ibid.*
23) Sperber, 1984. とくに p. 135を参照。
24) 菅野盾樹，1985a，p. 283以下参照。スペルベルらの考察には，遺憾ながらこの点の洞察がまったく欠けている。なお，外延指示とは異なる記号の働きについて，菅野盾樹，1986，参照。
24) 物真似は，ある概念表象の独特な反響であるかぎりで諷刺の笑いになる。単に姿を模すことがただちに諷刺にはならないことはあきらかであろう。ある人物のふりをして人を欺く犯罪者と諷刺とは関係がない（犯罪は諷刺となりえるが，これはまた別問題）。物真似と諷刺の関連について，ホジャート，1983が参考になる。p. 163，p. 211などを見よ。
25) 現代の芸術作品に表現されたパロディの諸相とその意義については，Hutcheon, L., 1985に豊富な例解に基づく考察が見いだされる。ただし，筆者がとりあげる「パロディ」の例は，われわれの見地からすると，むしろ多くがイロニーに相当すると思われる。したがって本書からイロニーについて数多くの興味ある知見をひきだせるだろう。
26) Sperber, 1984., p. 133, p. 135.
27) スペルベルらが固めたこの見地から，メタファー，特に隠喩について理論化を企てた，菅野盾樹，1985aを参照。
28) 「イロニーにはイロニー信号が付属している」とヴァインリヒはいう（1973，pp. 110-114)。同様な観察は多くの人が行っている。これに反対して，安井稔，1978，p. 156はイロニーに特有な声調などはない，とする。
29) ここではことばを媒体とする記号系にそなわるイロニー信号の比喩的な説明として，絵という名の記号系へ言及しているにすぎない。絵や音楽などにおけるイロニーの問題を考えるには，媒体を異にする記号系における引用の問題に系統立った洞察を加えなくてはならない。この点でGoodman, 1978, ch. 3 : Some Questions Concerning Quotationは有益である。絵にかぎって，その観察の骨子を述べておく。①絵には記号表現の直接引用に厳密に対応するものはない。②それ故，絵における直接引用の同定はかなり恣意的である。③また直接／間接の区別もあいまいである。ということは，絵ではもともとパロディがイロニーと相互に浸透しやすいということであろう。
30) 安井稔，1978，pp. 160-161.
31) 同書，p. 165にそうした主張がある。
32) 同書，p. 164はこの眼目を強調している。ただし同書は，この態度が向けられる命題を「言内の意味の反対の指示条件」と捉え，これを話し手の心の中に仮設するが，これは真相に数歩を隔てた誤りである。
33) Goodman, N., 1978, p. 124.
34) ある種の定義の身分をアプリオリな偶然性とみなすクリプキの見地は示唆にとむ。菅野盾樹，1983，p. 298以下，および，同，1985，pp. 222-226などを見よ。
35) ヘーゲル，1971，第三章：芸術の哲学的考察，第三節：イロニーと浪漫派，参照。
36) スペルベルらの提唱する有意性公理について，菅野盾樹，1985a，pp. 74-75，pp. 77-78，pp. 93-100を参照。なお本稿の続編3節を見よ。
37) 菅野盾樹，1985a，pp. 14-17，p. 81，pp. 140-142；同，1984；同，1986，などを参照。
38) 菅野盾樹，1985a，第三章。残念ながらこの洞察がスペルベルらの修辞論には欠けていると思われる。
39) 本稿は予定のスペースを超えたためここに全部を掲載できなかった。後半部は『年報人間科学』（大阪大学人間科学部社会系研究室）第7号，1987に掲載される。参照をお願いしたい。

［引 用 文 献］

Bergson, H., 1900, *Le Rire* dans *OEuvres, Edition du cententaire*, 1959, [『笑い』(林達夫訳) 岩波文庫，1976.]
Booth, W., 1974, *A Rhetoric of Irony.*

Clark, H. H. et al., 1984, "On the Pretence Theory of Irony" *J. of Experimental Psychology: General*, Vol. 113, No. 1.
Ducrot, O. et al., 1980, *Les Mots du discours.*
Fowler, H. W., 1968, *Dictionary of Modern English Usage.*
Goodman, N., 1968, *Languages of Art.*
Goodman, N., 1978, *Ways of Worldmaking.*
Goodman. N., 1979, "Metaphor as Moonlighting" in Sacks, S. (ed.), *On Metaphor.*
Grice, H.P., 1975, "Notes on logic and conversation" in P. Cole et al. (eds.), *Pragmatics and Semantics: Vol. 4.*
Grice, H. P., 1978, "Further notes on logic and conversation" in P. Cole (ed.), *Pragmatics and Semantics: Vol. 9.*
ヘーゲル (Hegel), 1971,『美学』(第一巻上) (竹内敏雄訳) 岩波書店.
ホジャート (Hodgart), 1983,『諷刺の芸術』(山田恒人訳) 平凡社.
Hutcheon, L., 1985, *A Theory of Parody.*
Jorgensen, J. et al., 1984, "Test for the Mention Theory of Irony", *J. of Experimental Psycho.: General*,Vol. 113, No. 1.
Merleau-Ponty, M., 1960, *Signe.*
ミカ (Muecke), 1973,『アイロニー』(森田孟訳) 研究社.
Quine, W., 1960, *Word and Object.* [クワイン『ことばと対象』(大出晃・宮館恵訳) 勁草書房, 1984.]
レカナティ (Récanati), 1982,『ことばの運命』(菅野盾樹訳) 新曜社.
佐藤信夫, 1981,『レトリック認識』講談社.
Smith, N. and D. Wilson, 1979, *Modern Linguistics.*
Sperber, D., 1984, "Verbal Irony: Pretence or Echoic Mention?", *J. of Experimental Psychology:General.* Vol. 113, No. 1.
Sperber, D. and Wilson, D., 1978, "Ironie comme mention", *Poétique, 36.*
Sperber, D. and Wilson, D., 1981, "Irony and the use-mention distinction" in P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics.*
Sperber. D. and Wilson, D., 1986, *Relevance: Communication and Cognition.*
菅野盾樹, 1983,『我, ものに遭う』新曜社.
菅野盾樹, 1984,「真理」(神川正彦編『哲学』勁草書房, 所収).
菅野盾樹, 1985a,『メタファーの記号論』勁草書房.
菅野盾樹, 1985b,「信念について」『年報人間科学』第六号, 大阪大学人間科学部社会系研究室.
菅野盾樹, 1986,「芸術と記号作用」(岩波講座・哲学第12巻『文化のダイナミックス』岩波書店, 所収).
Warner, M., 1973, "Black's Metaphors", *British Journal of Aesthetics*, 13, No. 4.
ヴァインリヒ (Weinrich), 1973,『うその言語学』(井口省吾訳) 大修館書店.
Wittgenstein, L., 1961, *Tractatus Logico-Philosophicus.* [『ウットゲンシュタイン全集』第一巻 (奥雅博訳) 所収, 大修館書店, 1975.]
安井稔, 1978,『言外の意味』研究社.

IRONY

Sugeno Tateki

The objective of this paper is to explain the generative and interpretative process of verbal irony from unified semiotic standpoint.

The first step in the explanation is to make us free from such the time-honored view as assumes that each verbal irony carries a figurative meaning opposite to its literal meaning. Doubling meanings and hypostatyzing them in such a way shoud be avoided. Instead, figures of speech including irony should be undersood according to pragmatico-rhetorical mechanism without any hypothesis of meaning as entity. This mechamism consists in giving the maximum relevance to symbol systems such as ironical, metaphorical, or some other figurative utterances.

Irony is neither a vehicle of meaning-thing nor means of pure intention behind it. It is rather the work created by human mind which mediates things and acts.

We have at least two types of theory of irony. One is the pretence theory, which is presented by many authors such as Bergson and Grice. This view assumes that in being ironic a speaker pretends to be an injudicious, either real or imaginative, person speaking to an uniniciated audience. The ironist, they argue, intends the addressee of the irony to recognize the pretence and thereby see his negative attitude towards the *locuteur*, audience, and the proposition expressed in the utterance.

The alternative theory, so-called mention theory which is presented by Sperber and Wilson, assumes that the ironist mentions and interpretes the literal meaning of the utterance as well as expresses an attitude towards it. In other words, irony consists in the echoic showing of certain identifiable proposition. Further it should be noted that speaker's derogatory attitude towards it is contained in showing of this kind.

Which theory is preferable ? There are various inadequacies in the pretence theory while the mention theory gets rid of them. Among them are the following:

(1) Some ironies are not of pretence. "What a gentle man Jack the Ripper is!", for example. To pretend is not a necessary condition for being ironical.

(2) It is evident that some pretence is not ironical (e. g. mimicry, drama, etc.). In other words, to preted is not a sufficient condition for irony.

(3) The pretence theory seems to require the mutual knowledge to explain interpreting utterances. This request is without reason. It is certain that to be ironical is to multiply the speakers, whom Ducrot names respectively *locuteur* and *énociateur*. Nevertheless, this means only that irony makes the principle of literalness

(Récanati) abolish so as to create polyphony. We thus should not make the *locuteur* into a real person.

(4) It is not always the case that the addressee, to whom the *énonciatur* speaks, is able to identify the persons in question.

*

We try to strengthen the mention theory by adding the new dimention of semantical function to its theoretical frame.

(1) Irony has to carry some marks such accent, tone, stylistic features, etc. for adrresse to identify the echoed proposition. But this does not mean that they are the marks in the same sense as bell's ringing is the mark of someone's being at the door. They function as certain form of meaning in much the same way as facial mouvements expresse some feeling.

(2) We can present a counter-example to the traditional view that the ironist intends to say the meaning opposite to his utterance. But echoed propositions sometimes may be true. For an utterance to be false is not the condition of its being ironical because, as *Romantishe Ironie* shows, truth may admit its alternatives.

(3) The dimension of showing as one of symbolic functions is particularly explicit in irony because its body is made of echo from top to toe. But other various figures of speech such as metaphor as a matter of fact have the dimention in problem as well. We argue this essential point in semiotics through analysing the interpretative process of irony and metaphor.